

## 日本におけるインターフェロン $\gamma$ 遊離試験の年代別陽性率に関する検討

<sup>1</sup>加藤 誠也    <sup>2</sup>太田 正樹    <sup>2</sup>末永麻由美    <sup>2,3</sup>平山 隆則  
<sup>4</sup>吉山 崇

**要旨：**〔目的〕 接触者健診におけるインターフェロン $\gamma$ 遊離試験（IGRA）の適用は高齢まで拡大されたが、クオンティフェロン<sup>®</sup>TBゴールド（QFT-3G）およびT-スポット<sup>®</sup>.TB（T-SPOT）の年代別陽性率は明らかになっていない。高齢者を含む一般人口および医療従事者における年代別IGRA陽性率の参考値の推定を目的にした。〔方法〕 接触者健診の対象者から感染リスクが低い集団を選出し、IGRAの検査結果を年代別に集計した。〔結果〕 一般人口のIGRA陽性率は20歳代から50歳代まで大きな違いはなく、60歳代、70歳代で上昇していた。60歳代、70歳代の一般人口のIGRA陽性率は推定既感染率の3分の1から5分の1程度であった。QFT-2Gを用いた地域における結果およびQFT-3Gによる接触者健診の検討結果との比較検討から、IGRA陽性率は60歳代では5%、70歳代では15%程度と推定した。QFT-3GとT-SPOTの陽性率に違いはなかった。また、医療従事者と一般人口のIGRA陽性率に違いはなかった。〔考察〕 算出された年代別IGRA陽性率は高齢者を含む接触者健診における感染の拡がりの推定の参考値として活用可能と考えられる。

**キーワード：**インターフェロン $\gamma$ 遊離試験，陽性率，既感染率，一般人口，医療従事者